

＜B-29日米合同慰霊祭＞ ミッション・パートナーと共に哀悼の意を表す MISSION PARTNERS PAY TRIBUTE AT B-29 MEMORIAL

July 3, 2023

By Staff Sgt. Spencer Tobler
374th Airlift Wing Public Affairs

6月24日、第374空輸航空団と航空自衛隊員の隊員、そして静岡市民が、第二次世界大戦中の静岡空襲の犠牲者を悼み、伊藤福松氏の無私な行いを称えるため、静岡県静岡市の賤機山で営まれた恒例の日米合同慰霊祭に参列した。

1945年6月20日、米陸軍航空軍B-29スーパーフォートレス2機が静岡空襲中に空中衝突し、乗組員23名が命を失い、また空襲で静岡市民2千人以上が犠牲となった。

静岡市の住民だった伊藤福松氏は空襲を生き延び、残骸から生存者を探した。空襲後にもかかわらず、彼は命からがら苦しんでいる2人のアメリカ人を見つけ、必死に怪我の手当てをした。しかし、救出された米兵たちは負傷によって間もなく息を引き取り、伊藤氏によって、空襲で亡くなった静岡市民とともに丁重に埋葬された。

第374空輸航空団司令官アンドリュー・ラダン大佐は、「B-29の衝突後、慈悲深い行動を示してくださった伊藤福松氏に感謝しています」「人命を最大限に尊重した伊藤氏の配慮があったからこそ、我々は今、同盟国としてここに立ち、彼の行動を通して伝えられるメッセージに思いを馳せる機会を得ることができたのです」と語った。

慰霊祭の主催者である医師・菅野寛也氏は、静岡空襲の当時12歳で、日米合同慰霊祭を主催し、その日亡くなった日米双方の犠牲者を追悼することを心に誓った。

菅野氏は、「天のご加護により、故伊藤福松氏の遺志を継いで参りました」「今日、私たちが享受している平和は、両国民の犠牲の上に得られたものであることを忘れてはなりません」と述べた。

今回、第374空輸航空団の隊員と共に、航空自衛隊静岡地方協力本部長武田恭一1等空佐と、初めて静岡市の難波喬司市長も参加した。

参列者は、献花と焼香を行い、戦没者に哀悼の意を表した。また、B-29の墜落現場で発見された黒焦げの水筒を使い、浅間神社のB-29慰霊碑にアメリカン・バーボンを献酒する伝統の儀式も行った。この儀式は、1972年の最初の式典から行われている。

ラダン大佐は、「アメリカ人と日本人として、我々は今、苦闘の末に築かれた非常に緊密な絆の恩恵を享受しています」「犠牲となった人々を思い起こし、平和を守るために絶えず努力することが、今日の我々の義務と特権です」とコメントした。

御年90歳の菅野氏は、いつの日か日米合同慰霊祭の伝統を静岡市に引き継いでもらいたい意思を語っている。

「これは私の一生の勤めです」「人生の大半をこの式典に捧げてきました。体調が許す限り、この式典を開催したいと思っています。伝統と友情、そして喜びを祝うために日米がひとつになるのを目の当たりにするのは、私にとってこの上ない幸せです。これこそ、伊藤福松氏が望んだことでありましょ」と菅野氏は述べた。

